

『左経記』 治安二年（一〇二二）条

書下し文

三橋 正*

平安時代の研究に古記録（日記）史料の精読・分析は不可欠であるが、変体漢文で書かれているだけでなく、平安時代の制度や諸文献についての基礎知識がないと解読できないなど、入り口でつまづいてしまい、敬遠される傾向がある。そのために、古記録史料は、平安時代の研究でも、国文学で取り上げられることは希であり、歴史学でも各自の研究対象に關する一部の記事を探し出す作業で終わってしまう場合が多い。しかしながら、それぞれの研究に携わる者は、専門の枠を超えて、より魅力的な平安時代史を構築し、その意義を発信しなければならない。そのため、の基盤作りとして、古記録読解のための指南書が必要とされているのである。

そんな想いで、小右記講読会（代表三橋正）では『小右記註釈 長元四年』上下（八木書店発売、二〇〇八年）を刊行し、講読会（例会）を継続して開催している。更に今年度から三年間、文部科学省科学研究費

補助金（基盤研究C）を得て、『小右記』註釈と平安時代データベースの作成」という新たなプロジェクトを展開させることになった。

本プロジェクトは、平安時代の代表的な漢文日記である『小右記』の正確な解読と、他の同時代史料との関連付け、及び平安時代研究の基礎となるデータベースの作成を目指すものである。摂関政治・国風文化（王朝文化）全盛期の実態を描いた最大かつ最良の日記とされる藤原実資（九五七～一〇四六）の『小右記』の註釈を中核にすえ、『日本紀略』だけでなく、藤原行成（九七二～一〇二七）の『権記』、道長（九六六～一〇二七）の『御堂関白記』、源経頼の『左経記』など他の同時代の諸史料との関連を示し、歴史研究の実践に役立つ情報を提供しようとしている。

『小右記』については、新たに全註釈を視野に入れ、五十年以上に及ぶ記載時期を次の四つの時期に分割し、それぞれの時期について並行して作業を進める。第一期は、実資が二十歳代から四十歳代前半までで、官僚としての精勤ぶりが見られる。第二期は、小野宮家の当主として三条天皇と藤原道長の間に立って活躍する長和年間。第三期は、後一条天皇即位後の道長政権下で儀式執行の第一人者とされた時期で、最も詳しい記事が残されている。第四期は、実資が儀式の監督者となる七十歳代以降で、先に註釈した長元四年が含まれる。現在の講読会で最も力を入れているのが第二期で、既に長和元年（一〇二二）のすべてと、同二年の半分以上を読み終えている。

本プロジェクトのもう一つの特徴は、平安時代研究に必要な諸事項を検索できるデータベースを作成することである。『小右記註釈 長元四年』でも、付録として人物・役職（官職・身分）・場所・儀式（年中行事）などに関する「考証」を載録し、古記録用語も検索できるように索引を

付けた。これを更に発展させ、ホームページ上で誰でも利用できるようにしようとしている。既に「小右記講読会」のホームページ (<http://saneyorikimeisen-u.ac.jp>) は開設され、上記の「考証」に関する検索システムも運用されている。検索システムはまだ試験的な段階であり、プロジェクトに賛同・協力する諸氏にログイン資格を与え、自由に各項目の閲覧・改訂・追加ができるようになっていく。また、併設されているブログでは講読会の予定や各自の進捗状況が逐次報告され、必要なファイルの受け渡しもできるようになっている。これによって、世界中のどこからでも本研究に関われるようになった。

将来的には、『小右記』をはじめとする諸史料と、これらのデータベースが有機的に関連づけられているホームページに発展させたいと思っている。また、全註釈を目指してはいるものの、責任のある校本を確定した上で書下し文を作成し、精度の高い註釈を付けていくのは難事業であり、その完成・公表には相当な時間を要するであろう。そこで、このような場を借りて、部分的ではあるが、成果を公表していきたいと思う。

『左経記』は源経頼（九八五―一〇三九）の日記である。経頼は宇多源氏、祖父は左大臣源雅信、父は参議左大弁扶義であり、外舅（妻の父）の一人に藤原行成がいる。長徳四年（九九八）に十四歳で叙爵（従五位下）、寛弘二年（一〇〇五）に玄蕃頭となり、次侍従・少納言、和泉守などの国守、蔵人・蔵人頭、内蔵頭、中宮亮などを経て長元三年（一〇三〇）に参議となった。特筆すべき経歴は、長和三年（一〇一四）に左少弁となつてから長暦三年（一〇三九）に左大弁で没するまで二十五年も弁官職を勤め、太政官政治の実務に携わったことである。それ故に、経頼の極官は参議であるが、左大弁であったことを特記して、左大弁源経頼の日記、すなわち『左経記』と呼ばれるようになった。

現存する『左経記』は長和五年正月から長元八年六月まで（後人が凶事に関わる事項を部類した『類聚雜例抄』を合わせると長元九年まで）であるが、『御産部類記』『台記』『魚魯愚別録』『官奏抄』『列見井考定部類記』などに引かれる逸文から、起筆は経頼が二十五歳で次侍従に補された寛弘六年（一〇〇九）以前で、五十五歳で病没するまで記されていたことが知られる。また実務官僚の立場から儀式次第を把握するため、『西宮記』勘物（青標書）を作成し、文書の書式や発行手続きについての先例を知るために『類聚符宣抄』（国史大系）を編纂したと推定されている。

『左経記』の記載は、先の『小右記』の記載段階ではほぼ第二段階から第四段階に相当し、『小右記』の記事の欠落を補うだけでなく、重複する事柄についても実務官僚という異なる視点から書かれており、両方を併読することで、より客観的な歴史像を描くことができるようになる。

『左経記』の写本は、江戸時代のものがほとんどであるが、治安二年（一〇二二）条には、鎌倉時代の写本と考えられる九条家本（宮内庁書陵部蔵）がある。これに基づく校本は、現在活用されている『増補史料大成』本で読解できなかった問題を解消させてくれる。本年条の九条家本による活字化は、『大日本史料』第二編之十八でなされているが、項目別に載録するという体裁をとっているため、一日条が複数の項目に分割されるなど、『左経記』を読むには非常に不便な構成となっている。

そこで本稿では、九条家本により作成した校本に基づいて書下し文を作成し、掲載する。この治安二年条については、本年度（平成二十一年九月）の二松学舎大学日本漢文プロジェクト「平安時代の漢文日記を読む」でも取り上げて講読した。この場を借りて、お世話になった磯水絵先生をはじめとする関係者、および参加者に謝辞を記したい。書下し文

の作成方法は、『小右記註釈 長元四年』と同じで、これによりある程度正確に本文（校本）を復元できるようになっている。校本、『小右記』などとの比較、註釈は、他日を期したい。

治安二年に経頼は三十八歳。弁官職に就いて九年目を迎えて権左中弁・内蔵頭となっており、正月には石清水行幸の行事を勤めた賞として正四位下に叙された。『左経記』治安二年条は、七月から十二月まで造されているが、他の年の記事と同じく、略本である。そこには、寛仁三年（一〇一九）に出家した藤原道長が建立した無量寿院（九体阿弥陀堂）を、金堂などが造立されたことで「法成寺」と改称し（七月十一日条）、その造立供養に外孫の後一条天皇（敦成）と東宮（敦良）を迎えるという大行事が描かれている。これまでの道長研究で軽視されがちであった、道長出家後の栄花を知ることができる重要史料である。時に右大臣となり政務の中核にいた藤原実資の『小右記』ほど詳細ではないが、実務官僚として準備に携わるなど経頼自身が重要な働きをしたことが記されており、同時代の実態解明には欠かせない。また、後一条天皇の平野社・大原野社行幸、太皇太后藤原彰子の仁和寺観音院造立（十月条）、関白藤原頼通の養子藤原信長の元服（十二月条）など、重要な記事が続く。是非、賞翫していただきたい。

『左経記』 治安二年

七月

八日。中宮、上東門院に遷御する事。

十一日。「无量寿」の号を改め「法成」と為すべき事。

行幸の平安の由(□)、奉幣使を立てらるる事。

十三日(□□日)。御堂、^{よま}厳はしむる事。

十四日。法成寺に行幸する事。〈大赦・勸賞等の事。〉

太政大臣(公季)、隨身を賜はる事。

十五日。御盆の事。

十六日。仏師定朝、法橋に叙(×為)せらるる事。

八月

五日。御堂の十禅師の事。

十一日。定考の事。

十七日。信濃の御馬の事。

廿三日(×十三日)。御庚申の事。

九月

八日。官奏の事。〈今年、之を始めてす。〉

九日。平座の事。

十五日。御堂の御八講の事。

十六日。平野・大原野(野×)行幸の日時の事。

十七日。行幸の雑事。

廿八日。行幸の日の論の事。

十月

一日。平座の事。

四日。行幸の路を巡検する事。

十一日。行幸の御祈の事。十死一生日(×日)の行幸の例の事。

十三日。仁和寺の観音院、造立せらるる事。

十六日。行幸の御祈の事。

十九日。奉幣の事。

廿日。陸奥国の交易の御馬御覧の事。

廿三日。地震の事。行幸の宣命の事。

廿四日。明日の行幸の雑事。

廿五日。行幸の事。

十一月

一日。大原野の行幸の路を巡検する事。

三日。崇福寺焼亡の事。平野祭、内穢に依り次の申に行なはるべき事。

五日。春日使の事。

七日。梅宮祭の事。

十一日。園韓神祭の事。

十二日。神今食祭の事。

十四日。節会の事。

十五日。解斎の御粥の事。

十六日。中宮、御服を着する事。

十九日。賀茂臨時祭の事。

廿三日。入道殿の御登山の事。幸路巡検の事。

廿八日。行幸の事。

十二月

八日。直物・小除目の事。平野・大原野(野×)行幸の賞の事。

十日。政有る事。

十一日。月次祭の事。

十九日。政有る事。

廿日。着袴の事。〈関白殿の御養子、内府の御一男也。〉

廿六日。政有る事。〈不堪定の事。〉

廿九日。政有る事。

卅日。追儺の事。

治安二年

七月

※1「中宮、上東門院に遷御する事。〈大宮、遷御を為すに依りて門外に於いて事由を啓す事。〉」

八日、丙子。

※1 参内す。今夜、戌刻、中宮（＝威子）、上東門院に遷御す。暫く御車、中門の外に留まる。先づ中宮権大夫能信卿をして御車に入るべきの由を大宮（＝宮）（＝彰子）に啓さる。〔大宮、兼ねて寝殿に遷御す。〕早く入御すべきの御返事（々返事）有り。仍りて中門の外に於いて昇下ろし、引入れ、西対に下御ふ。次いで余問ふ。「誰ぞ。」上達部、西廊の前に立ち、〔北上（＝上）東面。〕名謁（×各謁）す。了りて各退出す。

※1「『無量寿院』の号を『法成寺』に改むる事。〈行成卿、額を書く事。〉」

※2「行幸の御祈の奉幣の事。」

十一日、己卯。天陰る。甚雨雷電。晩に及び霽（×雨止）る。
※1「『无量寿院』の号を改め『法成寺』と為すべきの由、前日定められ了りぬ。仍りて権大納言（＝行成）、額を紙葉（×様）に書き、之を持参

らる。御堂の事（×下）に依り、近來の日々、上達部・諸大夫の参營むこと、之を限ること無し。

※2（今日、巳刻、行幸平安の由、奉幣使を立てらると云々。）

▽a「御堂、嚴はしむる事。」

※1「三后（＝彰子・妍子・威子）、御堂に行啓する事。」

十三日、辛巳。天晴る。

▽a 御堂に参る。莊嚴井びに所々の御装束了りぬ。

※1 入夜、皇太后宮（＝妍子）、御堂に行啓す。次いで大宮（＝彰子・中宮（＝威子）同躰して上東門院より御堂（々堂）に遷御す。上達部歩行。殿上人・本宮の宮司（々司）等、御輦に付く。深更に及び、各退出す。

※1「法成寺金堂供養の事。〔内（＝後一条天皇）行幸す。東宮（＝敦良親王）行啓す。三后（＝后）・尚侍（＝嬪子）渡御す。賞せらるる事。〕」

▽a「法成寺に行幸する事。〈大赦・勸賞等の事。〉」

▽b「太政大臣（＝公季）、隨身を賜はる事。」

十四日、壬午。天晴る。

※1 巳刻、法成寺に行幸す。〔金堂（×金堂）供養の事に依る也。〕東宮

（＝敦良親王）、同刻に行啓す。暫く乗輿を西大門に留む。左中将朝任朝臣（藏人頭）をして事の由を母后（＝彰子）に啓さしむ。御輿乍ら入御すべきの由、御消息有り。仍りて入御す。西中門に於いて御輿（×々輿）を下る。阿弥陀堂の東縁を経て御休所（々休所）に御す。〔金堂（×今堂）の西廊、縁を経るの間、中央の間に於いて仏を拝すること三度。此の間、上達部・殿上人跪きて砌の下に候す。関白（＝頼通、縁の上に出候す。持剣の近衛司同じく縁の上に退候（×進候）す。〕東宮、西

大門に於いて車を下る。「太政大臣（＝公季）、御車の尻に候ぜらる。」
阿弥陀堂の東縁を経て御休所（々休所）に御す。「御房南面。」内蔵寮、
内（×門）・東宮の縁道（×道縁）を調へ掃部寮に付す。「内は両面以て
絹絵（×面）也。東宮は紫絹。共（×甚）に以て布に裏を付す。二幅
（〇。）」

三后（＝彰子・妍子・盛子）并びに尚侍（＝姫子）、兼ねて御堂（々堂）の
西方に御す。女房等相分れて東西の廊に候ず。供養の作法、別に有り。
勅有り。天下大赦と云々。

事了りて、造作・作仏（々仏）の行事并びに大工等を賞せらる。「従
四位上齊（×濟）【作仏の行事】、従四位下為時【造作（×作造）の行事】、
従五位上茂安【金堂の大工】、修理権少進豊孝【五大堂の大工】。」次
いで上達部・殿上人の禄へ大褂、供奉の所司の禄（×符）へ疋絹有
り。子刻に及び、宮に遷る。

▽^b 太政大臣、勅有りて隨身を賜はると云々。内（＝後一条天皇）・大宮
（＝彰子）・皇太后宮（＝妍子）・中宮（＝盛子）、禄を僧等に賜ふ。又、同
じく度者を賜ふ。〈各一枚。〉

※1 「内蔵寮、御盆を調遣はす事。〈昨日行幸、今日調遣はすの例。〉」

十五日、癸未。天晴る。

※¹ 寮（＝内蔵寮）、御盆を備へて貢進す。「先例は十四日也。而るに昨日
行幸。仍りて今日、此の事有り。是、前例の中、去年始めて御盆を備
へらる。而るに日次宜しからず。仍りて十五日に、之を供す。之に因
（×日）り行なはるる所の事なり。」

※1 「仏師定朝、法橋に叙する事。」

十六日、甲申。天晴る。

※¹ 仏師定朝、造仏の功に依り、法橋に任ずと云々。

※1 「相撲の内取の事。」

廿五日、癸巳。天晴る。

※¹ 清涼の東庭に於いて左右の相撲の内取有りと云々。

※1 「相撲、東宮（＝敦良親王）参上する事。」

廿七日、乙未。天晴る。

※¹ 参内す。相撲、左勝つ。東宮参上す。「御料の高坏六本。折敷無し
と云々。」

▽^a 「相撲、侍従を召す事。」

廿八日、丙申。天晴る。

▽^a 参内す。相撲。楽有り。昨今、侍従を召す。

八月

▽^a 「政の事。」

※1 「法成寺金堂の十僧日役を始めらるる事。へ十僧を定めらる。誦
經・行香有る事。」

※2 「同五大堂に於いて五壇法を始めらるる事。」

五日、壬寅。天晴る。

▽^a 結政所（×語政所）に参る。「政無し。」

※¹ 次いで御堂に参る。戌刻、金堂に於いて十僧日役を始めらる。「毎

日、口別に大般若經卷。公の爲也。」誦經并びに行香等有り。今朝、十僧を定めらると云々。〔権大僧都扶公。【山階】僧都懷壽（×我）・実誓・権少僧都明尊・定基・永円。【已上山】永昭（照）。山階（山×）。権律師仁海・成典。【已上東】遍救。へ山。〕
又、始めて半夜より五大堂に於いて五壇修法を始めらる。〔七ヶ日。阿闍梨前僧都心誓・権少僧都明尊・権律師成典・阿闍梨摂源・内供奉延尋。〕

※1「定考の事。へ弁、申文に立つの間、忽に降雨。雨儀の道を渡る事。」

※2「他の史無きに依り、同じ史、兩度、次酌を役する事。」

十一日、戊申。天晴る。

定考に依り官（太政官）に参る。源中納言（道方）・左右大弁（朝經・定頼）、結政の座に参着せらる。上卿、庁に着す。申文。史等、文を結ね南に渡る。少納言經定起座して南に渡（×懸）る。左右少弁（義忠・頼明）起座するの間、忽に降雨。仍りて雨儀道より南に渡る。申文・請印・定考（×考、常の如し。次いで朝所に着す。

次いで宴座に着す。左大弁北面。右大弁南面。一献は左大弁。次酌は左中弁（重尹）、右大史忠誠。〔藍尾有り〕。二献は右大弁。次は余、右少史義光。三献は右中弁（章信）。次は右少史恒則。次は義光。〔頗る違例と雖も、他（×化）の史無きに依り為す所歟。右大史濟通参ると雖も着座せず。未だ其の心を得ず。〕次いで穩座（×隱座）。史生（×坐）・近辺の諸司・雅楽等を召すこと、皆、常の如し。〔雨（×西）の儀。〕事畢りて上下（上×）分散す。

▽a「仁王会の事。」

十四日、辛亥。天晴る。

仁王会也。仍（×依）りて八省に参る。

※1「中宮の所充の事。」

※2「諸司不具に依り馬牽延引の事。」

十六日、癸丑。天陰る。終日降雨。

兩大夫（齊信・能信、宮（威子））に参らる。御在所の東廂に於いて所充を定めらる。入夜、退出す。

伝聞く。「左衛門陣に饗を儲く。并びに上達部参会せらる。御馬を牽くと雖も、外記、諸司不具の由を申すに依り、饗座に着座せず。并びに御馬を分取らず、上達部退出せらる。」と云々。

※1「御馬を分けしむる事。」

十七日、甲寅。天晴る。

関白殿・御堂・内等に参る。

晩に及び、上達部・上官、右衛門陣の饗座に着す。三献。左少弁義忠朝臣、左大弁（朝經）の伝仰するを承はり、座に居し乍ら召使（×使）を召し、侍従を召さしむと云々。上達部行率して南廊に着し、御馬（信濃御馬）を分取らしむ。雨儀。事畢（畢×）りて退出す。

※1「御庚申の事。（東宮還御の事。事了りて中宮に引参りて連歌・被物等有る事。内蔵寮（×問議寮、之に臨む。）」

廿三日、庚申。天晴る。

寮（内蔵寮、御庚申の事を用意す。〔殿上の饗。上達部（部×）突重

(×衝)。碁手の紙、女房百、上達部百余、殿上人百余。御料廿帖。禄料足絹。」

晩に及び、参内す。上達部、召に依りて参入す。(或は束帶。或は宿衣・直衣。殿上人、又、宿衣・直衣。)束帶す。入夜、御装束す。其の儀、東(×束)の御隔子を下ろす。(但し南の間、之を上ぐ。)

南の第三間に茵一枚を敷き東宮の御座と為す。〔薙、南の第四柱に敷く。〕第一・二間に畳を敷き、上達部の座と為す。〔東西対。但し閑白殿、南の第三柱に迫りて着座す。〕昼御座を以て御座と為す。〔燈台二本を以て御油を着す。御前・上達部座前等。〕

亥剋に及び、東宮上らしめ給ふ。〔藤壺東廂并びに御湯殿西縁・大盤所等を経て、御前に参り給ふと云々。〔御直衣、御直衣上文。〕〕召に依り、上達部、御前に参る。仰有りて突衝を居す。〔東宮の殿上相兼ねる人々、之を参送る。鬼間より(×白)往還す。〕次いで御厨子所御膳を供す。又、東宮の膳を供す。〔高坏四本。〕数盃の後、碁手(×碁手)を召す。〔御料、楊宮に盛り、高坏を居す。東御料、楊宮に盛り、〔高坏を加へず。〕上達部・殿上人の料、折敷に盛る。〕集難の後、連歌(×桂哥)の事有り。〔此の間、東宮還御す。〕曉(×曉)に及び、上達部・殿上人引きて中宮の御方に参らる。〔上御曹司に御す。〕忽ち北庭に畳を敷きて酒肴を羞む。数盃の後、連歌の事有り。次いで被物。上達部(御衣)、殿上人(足絹)。明に及び、人々退出す。

九月

※1「政の事。」

※2「今年始めての官奏の事。」

八日、乙亥。天晴る。

※1「^{まつりごと}結政所に参る。政有り。上は皇太后宮大夫(道左)。請印畢りて参内す。〔南所、物忌の由を申す。〕

※2「^{かんろう}頃之。右府(実資)参らる。官奏の事有り。〔^{かたがよみ}鑑文三枚(×相)。今年初めて此の奏有り。〕

※1「宜陽殿の平座の事。」

九日、丙子。天晴る。

※1「晩景、参内す。権大納言(行成)、勅を奉はりて宜陽殿に座を敷かしめ并びに物を居ゑしむ。諸卿相共に移着す。次いで弁・少納言、日華門より着座す。一献少納言信通。二献余。三献左少弁義忠。次いで侍従を召す。次いで仰有り。外記、見参・目録等を奉る。上卿(行成)開見るの後、御在所に進みて之を奏す。〔御物忌也。〕次いで帰座し、少納言を召して見参を給(給×)ひ、弁を召して目録を給ふ。各退出す。」

※1「御堂(道長)、無量寿院に於いて母氏(時姫)の奉為に八講を修する事。」

十五日、壬午。天晴る。

※1「入道殿(道長、無量寿院(寿×)に於いて母の奉為に八講を修せしめ給ふ。〔是、御遺言に依ると云々。〕請僧廿二口。證誠二口。〔権僧正院源・大僧都林懷。〕講師十口。〔権大僧都(都×)慶命・少僧都懷寿・前少僧都心誓・権少僧都実誓・明尊・定基・永昭・権律師遍救・已講融碩・経救。〕問者十口。〔撰源・恒舜・貞円・念算・頼寿・忠命。〕已上、延暦寺。〕貞範・道算・円證。已上、興福寺。〕濟慶。已上、東大

寺。〕入礼の上達部・殿上人、多く其の数有り。南廊を以て上達部の座と爲す。西廂を以て殿上人の座と爲す。中門の南廊を以て諸大夫の座と爲す。先づ会集の鐘を打つ。諸僧、南門に集まる。諸卿入堂す。諸僧(×毳、中嶋等の橋を経(×僧)て入堂す。事了りて上達部、饗座に着す。次いで夕座を始む。事畢りて僧俗退出す。

※1「平野・大原野行幸の日時を勘へらるる事。」

十六日、癸未。天晴る。

召に依り参内す。春宮大夫(『頼宗』、左仗に於いて陰陽寮を召して平野・大原野行幸の日時を勘へしむ。奏聞す。次いで行事の上以下を仰下さる。〔春宮大夫頼宗・右大弁定頼・右少弁頼明・史貞行宿禰。〕

※1「御堂御八講五卷の事。〔宮々の御捧物の事。〕」

※2「行幸行事所始の事。〔神宝始の日時を勘ふ。行事所(□□)の弁

(□)三人(×二人)の例。〕」

十七日、甲申。天晴る。

御堂に参る。御八講五卷日也。宮々より御捧物等有り。〔太宮(『彰子』、證誠は銀鉢、講師以下は別盤。【銀枝】證誠の後、皇太后宮(『妍子』【別盤廿二枚、切枝。】・中宮【別盤廿二枚、切枝。】。〕被物。自余の上達部・殿上人の捧物、各、善美を尽(×盡)して隨身す。

事畢りて春宮大夫(『頼宗』、行幸の行事、加寄せらるるの由を告げらる。即ち右大弁(『定頼』)並びに余・右少弁(『頼明』)等を率ゐて行事所に着す。〔大膳職の庁屋。〕陰陽寮を召して神宝を作始(×候如)むべき日時を勘へしむ。次いで雑用の請奏等を成らしむ。余をして之を奏せしむ。次いで上(『頼宗』)以下退出す。

※1「大外記頼隆と主計頭吉平と、子日の行幸の日を相論する事。左仗に於いて定めらるる也。」

廿八日、乙未。天晴る。

大外記頼隆(×頼隆、前日、平野行幸の日、禁忌有るの由の勘文を奉る。主計頭吉平を召問はる。即ち禁忌無きの由の勘文を奉る。仍りて右府(『実資』、勅を奉はりて、今日、左仗に於いて定めらるる云々。

十月

※1「平座の事。」

一日、丁酉。天陰り雨降る。

未刻許、御堂・内等に参る。皇太后宮大夫(『道方』、仰を奉はり宜陽殿の座を敷かしめ、並びに饗饌を居ゑしむ。移着す。次いで弁・少納言、日花門より着座す。三献了りて侍従を召す。次いで汁(×計)を居る。箸(×筴)を立つ。次いで又、勸盃す。次いで外記を召して見参を奉らしむ。開見て御在所に進み、奏聞するの後、本座に帰る。少納言・弁等を召して見参・目録等を給ふ。次第に退出す。

※1「平野行幸の巡検の事。〔行事所より仮殿遷御の用途を遣はす事。〕」

四日、庚子。天晴る。

午刻、行事所に着し、史生・諸司等を率ゐて行幸の路を巡検す。又、申刻を以て仮殿を作り御体を選し奉る。神殿を作らむが為なり。〔行事所より、御体を覆ひ奉る、並びに引廻す料、禰宜・神人等の淨衣の

料の絹布等、之を給はしむ。」晩に及び帰洛し、上卿(々卿)(「頼宗」の許に参上す。路の案内並びに社の作事を申す。事(々)了(々入)りて帰宅す。

路の作改。待賢門(×泰賢門)より始め偉鑒門(×健鑒門)に至る東一町。(左京。)偉鑒門(×健鑒門)の東一町より始め左比大路に至る(右京。)左比大路より始め野寺の西北面、並びに御在所の掃治。(近江。)

※1「行幸の御祈の奉幣の日を勘へらるる事。」

※2「太宮の御堂供養の御誦経有るべきに依り行幸の日延引の事。」

※3「十死一生日の行幸の例。」

十一日、丁未。天晴る。

春宮大夫(「頼宗」、左仗に於いて主計頭吉平を召して行幸の御祈の奉幣使立つべき日時を勘申せしむ。吉平、大略、明日、使立つべきの由を申さしむ。

※2 関白殿(「頼通」)仰せられて云はく「十三日の大宮の御堂供養の事に依り、御誦経有るべし。就中、不断御誦経僧、大内に候(々作)ず。何ぞ前斎無く、伊勢使を立てらるる哉。」吉平申して云はく「仰の旨、尤も然るべし。但し明日・明後日の外、勘申すべき日無し。」者り。関白殿仰せられて云はく「御祈無く行幸有るべからず。行幸の日を改勘ふべし。」者り。吉平申して云はく「廿五日(辛酉)は吉日也。但し十死一生為り。是、先例は忌まれず。近則、桓武(×恒武)天皇、今月辛酉を以て奈良(×難良)より(×白)遷都す。其の後、往々、此の例有り。又、御物忌に相当たると雖も、是、失物の御物忌也。先例は忌ましめ給はず。仰に随ひて左右すべき也。」者り。仰せて云はく「失物の御物忌、更に忌ましめ給(々始)ふべからず。十死一生、忌まれ

ざるの証有ると雖も、上古(×吉)の事、若し故有る歟。近代の例、勘申せしむべし。」者り。

上卿(「頼宗」、外記に仰せて勘へしむ。大外記頼隆勘申して云はく「延喜十七年三月十六日(乙丑)、東六条院に行幸す。同十八年十月廿六日、川原院に行幸す。天曆三年正月五日(己酉)、東二条院に行幸す。長徳元年正月二日、東三条院に行幸す。」者り。

※1「大宮の御堂供養の事。(仁和寺観音院の事。)」

※2「神社行幸の行事、御堂供養に参らざる事。」

十三日、己酉。天晴る。

※1 太皇太后宮(「彰子」、仁和寺観音院、御堂を造立せらるる供養。十僧の外、百僧、請はると云々。又、堂具等、皆、新たに調入れらると云々(×考)。大内・皇太后宮・中宮並びに御旁親(×方親)の所々より、御誦経有ると云々。事了りて、院司延尋、権律師に任せらる。但し、今日、行啓無し。入道殿(「道長」)並びに上(「後一条天皇」)・関白殿(「頼通」)・右府(「実資」)・内府(「教通」)以下上達部多く以て参らると云々。余、行幸の行事有るに依り、参らず。倩、事理を思ふに、必ず忌むべからざると雖も、去夕、上(「頼宗」)・宰相(「定頼」、忌むべきの由を示さる。仍りて参らざる也。

※1「行幸の御祈の御誦経定の事。(両社一度に祈申すべし。)」

十六日、壬子。天晴る。

参内す。春宮大夫(「頼宗」、左仗に於いて行幸の御祈の御誦経の僧名を定められ、並びに日時を勘へしむ。奏聞す。平野・大原野一度に祈申さるべき也。

入夜、朝夕の陪膳を奉仕す。丑刻に及び、退出す。

※1「伊勢使のト串を開く事。」

十八日、甲寅。天晴る。

春宮大夫(「頼宗」、左仗に於いて明日の伊勢使のト串を開かしめ給ふ。

※1「両社行幸の奉幣の事。」

十九日、乙卯。天晴る。

春宮大夫参内し、今日の奉幣の宣命の草並びに清書(「請書」)等を奏す。八省院に於いて使等を立てらると云々。是、来たる廿五日の平野・来月廿八日の大原野の行幸の御祈也。余、障有るに依り参らず。入夜、参内し、朝夕の膳々を奉仕す。候宿す。

※1「陸奥国の交易御馬を御覧する事。〔交易使馬允。二河原毛を以て

御堂に奉らるる事。〕」

※2「解文を奏する以前、御馬を御覧する事。」

廿日、丙辰。天陰り甚雨。午刻に及び天晴る。

陸奥国の御馬交易使左馬允藤原行則、御馬廿疋を交易し進る。今明御物忌に依り去タ(「吉タ」)籠宿す。但し解文に於いては、大夫史公親朝臣に付し了りぬと云々。仰有りて、先づ清涼東殿に於いて御覧す。〔関白殿、御簾の中に候す。左少将(「右少将」)顕基(「頼基」、御前に候す。〕勅使有り。右少将良頼、二河原毛を以て入道殿・太閤殿(「太閤」)に遣はす。

※2 晩に及び、右大臣(「実資」、左仗に於いて不堪の申文(「由文」)を申

さしむ。次いで皇太后宮大夫(「道方」、藏人右中弁章信をして御馬の解文を奏(「奏」)せしむ。仰せて云はく「御馬に至りては、先に御覧じ了りぬ。御物忌に依り解文を奏すべからず。早く分取らしむべし。」者り。上卿、仰を奉はり、南廊の前に於いて左右寮に分取らしむ。但し、東宮、一疋を牽分くと云々。

▽a「地震の事。」

※1「行幸の宣命の趣の事。」

廿三日、己未。天晴る。

▽a 卯刻、地震。

春宮大夫(「東宮大夫」(「頼宗」)の御許に参る。行幸の宣命の趣を奉るべきの由を申さる。関白殿(「頼通」)に参り事由を申す。仰せて云はく「御堂(「道長」)に参り案内を申すべし。是、古の御祈願の心を知らざるに依る也。」者り。御堂に参り、事由を申す。仰せて云はく「古の御願に依り、御堂に事無く、平安に御坐すべきの由也。」此の由を以て関白殿に申す。次いで大夫(「頼宗」)に申す。行事所(「給事所」)に参り雑事を行なふ。入夜、帰宅す。

※1「神宝・舞人の装束を藏人所に渡す事。」

※2「社頭の御装束の事。」

※3「平野行幸、必ず北野の幣有る事。〔今度忘れ、即ち別当に仰せて祈らるる事。〕」

廿四日、庚申。天晴る。

※1 早旦、行事所に参る。神宝(「実」)・舞人の装束等を藏人所に渡す。

※2 社頭に参り御装束等の事を行なふ。御在所並びに所々に帷幔等を立

りて同じく叙せず。亥刻に及び、帰宅す。具なる由、別記に有り。

十一月

つるの程、皆、指図に在り。昏黒に臨み、帰宅す。
 ※³外記惟経(×是経) 来たりて云はく「行事の上(＝頼宗) 仰せて云はく『平野行幸の時、前例、必ず北野奉幣有り。而るに思失ひて申行なはず。今に於いては為何。早く別当遍教に召仰せて祈申さしむべし。』」者り。承はり了りぬの由を申さしめ了(×之りぬ)。

※1「大原野行幸の巡檢の事。」

一日、丁卯。天陰る。

巳刻、右少弁(＝頼明) 相共に史・史生(々々)・官掌・木工・檢非違使等を率ゐて、朱雀門より始めて大原野社に至るまで巡檢す。木工寮、札を以て作路の国の界を立つ。

未刻に及び、社に到る。御在所の丈尺を量定め、同じく札を立つ。

此の間、降雨。申刻に及び、帰京す。

山城国司、寺戸の辺に於いて供給す。入夜、甚雨。戌刻許、帰宅す。終宵雷雨。

国充。「朱雀門より始め七条大路に至る。【左京】七条大路より始め浄福寺の巽角に至る。〔右京〕浄福寺の巽角より始め皮嶋の中間に至る。〔大和〕皮嶋の中間より始め道寺に至る。〔河内〕道寺より始め狼河に至る。〔摂津〕狼河より始め二鳥居に至る。〔和泉〕桂河浮橋。〔山城〕檢非違使をして河尻平駄等を点定せしめ充給ふべし。又、津頭の材木等を点借し同じく借給ふべし。御在所掃治並びに沙。〔丹波。〕」

※1「崇福寺、雷火の為に焼亡する事。」

※2「内裏の犬死穢に依り中宮・東宮使止むる事。」

※3「近衛使、参内せず進発すべき事。」

※4「平野祭、別使有るべきに依り、次の申を用ふべき事。」

※1「平野行幸の事。」

廿五日、辛酉。天晴る。

寅刻、宿衣を着し、社頭に向かふ。所々の御装束並びに他の雑事を催行なふ。

午刻に及び、束帶す。未刻に及び、日華・建春・陽明等の門、並びに大宮・一条・野寺の西北等の路を経て行幸す。所々の饗了りぬ。主水司、御手水を供す。次いで内蔵寮、御祓物を供す。〔御幣・神宝等、皆、御前に昇立つ。〕御禊(×禊)了りて、使、幣を捧げて立つ。御拝了りて、使婦座す。次いで右大弁〔定頼〕、挿花を取り使に賜ふ。侍臣、舞人・陪從に賜ふ。〔北幔の外に於いて之を賜ふ。〕次いで右府(＝実資、使に目(×目)し、宣命を賜ふ。〔公卿の座に於いて之を賜ふ。〕次いで使、舞人等を率ゐて社頭に参る。先づ東遊。次いで雅楽・樂舞を奏す。〔左は万歳樂・龍王。右は延喜樂・納蘇利(×内蘇利)。〕此の間、舞人、御馬を馳す。〔南より北(×北)に向かひ、御馬(×々々)之を馳す。〕舞了りて、使、御在所に帰参し、藏人頭〔朝廷(×仁)に付して、返事を申す。次いで右府、見参を奏(奏×)す。禄を給ふ。次いで還御す。〕

社司等の賞、各、他人に譲与すること有るに依り、叙位の者無し。又、社預、卜部(×下部)信親、追ひて申請すべきの由を申さしむ。仍

三日、己巳。天晴る。

※1 「去々、崇福寺の仏像・堂舎、皆尽く焼亡す。」者り。「塔の本に雷

火^{※2}と云々。」

※2 昨日より大内、犬死穢有り。」者り。仍りて中宮・東宮の春日使、

停止せらるること已に了りぬ。内蔵寮・近衛府の使等、参内せず進発

すべきの由、仰有りと云々。又、平野祭、次の申日を用ふべきの由、

宣旨ありと云々。「是、別使を立てらるるに依る也。」者り。」

※1 「春日の近衛使の出立所の事。」

※2 「平野祭延引の由、下知する事。」

五日、辛未。天晴る。

※1 未刻に及び、春日使の出立所に向かふ。「左少将頭基、閑院の東台

より。」上達部・殿上人来集す。次いで舞人・陪從着座す。一献、粉

熟^{※2}。二献、飯汁。三献了りて、歌笛を発す。次いで穩座^{※3}。南庭に於いて求子。次いで使、尊者に勧盃す。次いで牽馬を見

る。「枉馬・隨身等を見ず。」次いで使^{※4}進発す。「穢に依り参

内せず。仍りて直ちに蔵司より発すべしと云々。」次いで人々退く。

※2 入夜、右府^{※5}より次の申日を以て、平野祭を行ふきの由、仰

有り。仍りて大夫史貞行の許に仰遣はすこと已に了りぬ。

▽a 「梅宮祭の事。」

※1 「春日使の帰立の事。」

七日、癸酉。天晴る。

▽a 晩景に及び、御堂^{※2}に参る。次いで大宮^{※3}に参りて梅

宮の御祝^{※4}の陪膳を奉仕す。

※1 次いで祭使の帰立の饗所^{※2}に向かふ。秉燭、使来着す。

門中に於いて勧盃す。次いで使入り了りぬ。次いで舞人・陪從、南庭

に於いて歌舞す。了りて次第に着座し、一献。「春宮大夫^{※3}。」上達部の座に粉熟。「舞人・殿上人の座、兼ねて飯を居す。」二献。

「中宮権大夫^{※4}。」三献。「皇太后宮大夫^{※5}。」次いで禄を賜

ふこと常の如し。次いで上下分散す。

※1 「園韓神祭。」

※2 「穗坂の御馬を分取る事。」

※3 「五節参入の事。」

十一日、丁丑。天晴る。

※1 昏黒に及び、園韓神祭^{※2}に着す。祭儀^{※3}、常の如し。

但し諸司不具。仍りて外記師任^{※4}、内舍人高正を以て大蔵・宮

内・造酒・大膳・馬寮等の代官と為すべきの由、上卿^{※5}〔左兵衛督^{※6}〕

右兵衛督^{※7}に申す。

※2 事了りて参内す。右衛門督^{※8}、左仗に於いて、近衛将・馬寮

助等を候具せしむ。南廊の兀子の座に参着^{※9}す。穗坂の御馬を

分取らしむ。余同じく此の座に着す。

※3 事了りて北陣に向かふ。五節の舞姫等参入す。「先づ式部大輔^{※4}」

業。次いで皇太后宮大夫^{※5}。次いで惟任朝臣。次いで頼国^{※6}〔頼

円朝臣。〕了りて主上、御師の宿所に御^{※7}す。舞姫の子等、帳

台に参上す。丑に及び、事了りて退下す。次いで還御^{※8}す。余

退出す。

※1 「殿上並びに中宮淵醉の事。」

十二日、戊寅。天晴る。

※1 今明日御物忌と云々。殿上より信濃守（信乃守）惟任朝臣の五節所の肴物を召す。酔に乗じて中宮に参ると云々（×之）。盃酒を賜はると云々。

※1 「淵酔の事。〈大宮の御方、和歌有る事。〉」

※2 「神今食の事。」

十三日、己卯。天晴る。

※1 童女御覽と云々。殿上より讃岐守頼国朝臣の五節所の肴物を召す。

酔に乗じて大宮に参り、盃飯並びに和歌の興有ると云々（×之）。

※2 今夜、神祇官に於いて神今食祭有ると云々。上は皇太后宮大夫。宰相は式部大輔（「広業」）。并は右少弁（頼明）。少納言（経定）。

※1 「解斎御粥の陪膳の事。」

※2 「節会の事。」

※3 「大蔵録、右府の祿を取り、右府咎仰せらるる事。〈輔若しくは丞取るべき也。〉」

十四日、庚辰。天陰り降雪。

※1 未刻に及び、小舍人來たりて申して云（々）はく「修理亮藏人（「則長」）仰せて云はく『解斎御粥の陪膳無し。只今、参るべし。』」者り。

※2 仍りて車を馳せて参内す。四位侍従（「経任」）陪膳す。

乗燭に及び、南殿に御す。（小忌の上の遅参に依る也。）晴儀を改（×）及め、雨儀と為す。戌刻、行列す。上達部六人。（右大臣（「実資」）

【内弁】・皇太后宮大夫（「道方」）【小忌の上】・右兵衛督（「経通」）・皇太后宮権大夫（「資平」）・式部大輔（「広業」）（小忌の宰相）・右大弁（「定

類）。諸大夫、幾ならず。丑刻に及び、事了りぬ。上下退出す。

※3 風聞す。「大蔵録、右府の御祿（×録）を取り授け奉るの間、咎められて云（×之）はく『大臣の祿（×録）、輔若しくは丞取るべし。而るに録、取る所は違例なり。』」者り。仍りて取らず。」と云々。

※1 「解斎御粥の陪膳の事に依り、殿上人除籍の事。」

十五日、辛巳。天晴る。

※1 早旦、関白殿（「頼通」）に参る。仰せられて云（々）はく「昨日、陪膳無きに依り、晩に及ぶも解斎御粥を供さず。藏人則長を召問ふに申し

て云はく『左京大夫経親朝臣侯宿す。仍りて兼ねて御粥の陪膳を奉仕すべきの由を仰知らず。期に臨み、候ぜしむるの処、已に退出すと云々

（×老）。仍りて春宮亮（×東宮亮）泰通朝臣を召さしむ。而るに午上の障を申して参らず。仍りて経頼（×親）並びに経任朝臣を召さしむの処、

共に参る。経任朝臣供し了りぬ。此の如きの間、延引する所也。』」者り。申すが如く、則長、罪無し。仍りて経親・泰通等の籍を除かしむ

ること已に了りぬ。」者り。

※1 「中宮の御着服の事。」

※2 「吉田祭、中宮御服の間、関白除服して祭らるべき事。」

十六日、壬午。天晴る。

※1 御堂（「道長」）・関白殿（「頼通」）・内（「後一条天皇」）等に参る。亥二刻に及び、中宮（「威子」）御服を着す。「甲方に於いて之を着す。庁、御帯並びに小褂一領を調ふ。【にび（二不）色。すずしの（×給々之乃）平也。】折櫃に入れ高坏に居ゑ、之を奉る。」余、之を取り、女房に伝へ

奉らしむ。着せしめ給ひ了りぬ。小褂は御所に留む。御帶下ろし給ふ。

即ち庁に給ひ作らしむ。了りて退出す。

※² 明後日の吉田祭、御服の間為るに依り、庁、用意せず。仍りて関白殿、今日御除服。即ち祭るべきの由、仰せられりぬ。

※1「賀茂臨時祭試楽の事。」

十七日、癸未。天晴る。

賀茂臨時祭試楽。求子の間、秉燭すと云々。

▽a「平野祭に参る事。」

※1「臨時祭の装束、縫ひ給ふ所の事。」

十八日、甲申、天晴る。

▽a 御堂・関白殿・内等に参る。源中納言（＝道方）相共に平野社に参る。

祭の作法、常の如し。晚に及び、帰宅す。

※¹ 明日の使の料の下襲（×於）等（柳（×柳）の下襲・表袴。）持来たる。須く明旦、参上して給はるべし。而るに兼ねて縫定めしめむが為、密々（×密々）、納殿預藏人行親に触れて請取る所也。

※1「臨時祭の事、（使を勤む。）」

※2「拯の舍人等に禄を給ふ事。」

十九日、乙酉。天晴る。

※¹ 辰刻、朝衣（巡方・魚袋。）を着し、参内す。陪従・舞人、装束を給はる。午刻に及び、御禊（×禊）。次いで座を敷き、物を居ゑ、使等を召す。余、舞人・陪従を率ゐて御前の座に着す。一献。（頭中将朝任。）二献。（中宮権大夫勸盃（×盃）しりりぬ。即ち庭中の座に着す。）畢りて関白殿、庭中の座に着す。三献。（皇太后宮大夫（＝道

方。）余、笏を挿み盃を請ふ。座の前の突重の北方を経て、関白殿の前に進居す。（相去（×去）ること三四許尺。頗る未申に向かふ。）献

盃巡行の儀、例の如し。四献。（権大納言（＝行成）。巡行、前の如し。）了りて重盃。（使等の座、侍従経任朝臣・左少弁（×左少将）顕基朝臣。陪従の座、中宮権大進為善等也。）挿頭を賜はる。（関白殿。余（×途）の料、藤花。）次いで仰有りて起座す。次いで召有り。余、陪従・舞人等を率ゐる。歌笛を奏す。漸く御前に進立つ。次いで舞事了りて、社頭（＝賀茂下社）に向かふ。所司、幄を立て、饗を居う。垣下の人々勸盃す。了りて御前に参る。掃部、座を敷く。余着座の後、社司に御幣二捧（×俵）・阿礼の絹十七疋・庭積の調布百段・社司の禄の綿百屯・膝突の布二段等を計渡（×計渡）す。次いで四拝し、宣命を讀む。次いで四拝し、宣命を社司に授く。次いで祝詞。了りて御馬を廻らす。次いで歌舞。次いで舞人、御馬を馳す。

上社に向かふ。作法、下社の如し。事了りて帰参す。

先づ関白殿の御所に於いて、聊、盃飯の事有り。（余、儲くる所也。）次いで召有りて御神楽の座に着す。晚に及び、事了りぬ。禄を賜はり、退出す。

※² 明旦に及び、共の舍人等に禄を賜ふ。（右近府生（×座生）清武（×請武）、関白殿の御隨身、白褂一領、紅袴一領、絹十疋。左近府生為弘、白褂一領、絹五疋。入道殿の御馬の舍人、白褂一重、絹六疋、手作六段。舍人の従者、二段。）居飼・馬副六人。口取の近衛府の者二人。（左近府生（×出）為弘、右近府生清武。）雑色廿人。（白装束。）取物舍人四人。（同じく白装束。）弁候一人。侍者十余人許。

▽a「大原野行幸の雜事。」

▽b「中宮除服の事。」

廿二日（×廿三日）、戊子。天晴る。

行事所^{▽a}に参る。終日、雑事を定行なふ。入夜、帰宅す。

今夜亥刻、中宮御除服。

※1「入道殿御登山の事。」

※2「同じく御願十二神将供養の事。〔講師興福寺の人。〕」

※3「大原野行幸の巡検の事。」

廿三日、己丑。天陰る。降雨せず。

今晩、入道殿（^{※1}道長、^{※2}関白殿（^{※1}頼通）并びに内府（^{※1}教通）、然るべき上達部・殿上人・諸大夫等を率ゐて、登山せしめ給ふ。是、明日、

御願造立の十二神将（×^{※3}越）を供養し、〔講師は権少僧都永昭。件の人、興福寺の僧也。〕并びに内論義（^{※3}論議）を行なはれむが為也と云々。

刻に及び、行幸の行事の上卿以下、皆、布袴を着して朱雀門に会合す。幸路を巡検し、未刻、社に着す。戌刻に及び、入浴す。

※1「行幸の行事の為に大原野に向かふ事。」

廿七日、癸巳。天陰り、時々降雨。

早旦、大原野社に向かふ。所々を装束せしめむが為也。

※1「大原野行幸の事。」

廿八日、甲午。天晴る。

巳刻以前、所々の装束等皆了りぬ。

午刻、着御す。即ち、御禊（×^{※1}巻）・東遊・音楽等了りぬ。見参を奏し、禄を給ふ。申刻に及び、還御す。戌三刻に及び、還宮す。具なる

由、別記（×副記）に在り。

十二月

▽a「直物・小除目の事」

※1「行事の賞を行なはるる事。〔外記頼隆【助教】越えるべきに依り、大博士貞清加叙の事。〕」

八日、己卯。天晴る。

御堂・内等に参る。右府（^{※1}実資）、左仗に於いて仰を承はり直物を

行なはる。此の次に、小除目有り。

又、平野・大原野社行幸の賞を行なはる。〔右大弁従三位。外記頼

隆正五位下。史貞行従五位上。此の次に博士貞清正五位下。外記頼隆、助教（×^{※1}越）を兼ねるに、正下に叙すべし。而るに、貞清、大博士（士

×）為るに下臈と為るべき由、愁申すこと有り。仍りて加叙せらるると云々。上卿（^{※1}頼宗）并びに余・右少弁、申す所有るに依り、暫く之を行（×引）なはれず。〕

※1「政の事。」

※2「能登国の勘出文の事。」

十日、乙巳。天晴る。

結政所に参る。政有り。并びに加賀の詔使の返事を申す。〔上は右衛門督（^{※1}実成）。〕事了りて、上退出するの間、南所、物忌の由を申す。仍りて直ちに参内す。

中宮権大夫（^{※2}能信）、左仗に於いて能登国の勘出文を申さしむ。件の国の勘出、前日、権大納言（^{※1}行成）下されりぬ。而るに脱漏の符

等有るに依り、重ねて又、之を申すと云々。未聞の事也。

※1「月次祭の事。〔雅楽頭を以て王並びに式部輔の代と為す事。祭の時の王の座空しき事。〕」

十一日、丙午。天晴る。

分配の并の障有るに依り、神祇官に参りて月次祭の事を行なふ。雑事、皆、例の如し。但し王並びに式部輔無きに依り、雅楽頭為成朝臣を以て王並びに輔の代と為す。列を引かしむるの間、並びに祭の時、王の座已に以て空し。只、外記、代官許を申す也。是、前例と云々。

※1「政の事。〔加階の人参着す。仍りて南申文、吉書を扱ふ事。内の召と称して中宮に参る事。〕」

※2「中宮の大神使の事。」

▽a「尚侍、東宮に参る事。」

▽b「慈徳寺御八講の事。」

十九日、甲寅。天晴る。

結政所に参る。政有り。右衛門督（『実感』・右大弁（『定類』）。右大弁（『々々』）加階の後、今日始めて参着す。仍りて結政並びに南の申文等、吉書等を扱ふと云々。

余、内の召の由を称し、中宮に参り、大神使を立てらるるの御稞（『々々』の陪膳を奉仕す。

晩に及び、退出す。御堂に参る。亥刻に及び、尚侍（『嬪子』、東宮に参らしむ。仍りて御共に参る。深更（『源更』）に入り、帰宅す。慈徳寺御八講始と云々。

※1「内府の若君着袴の事（□□□□□□□□）。関白殿の養子也（□□□□□□□□）。

□。』

※2「権大納言子元服の事。」

▽a「御仏名の事。」

廿一日、丙辰。

関白殿（『頼通』）に参る。今日申刻、若君（『信家』）着袴。仍りて御装束一具を送らしめ給ふ也。被物有り。（白褂・袴白。大宮（『彰子』・皇太后宮（『妍子』、皆、御装束有り。）事了りて、内府、馬二疋・劍一腰を以て関白殿に奉らる。関白殿（『々々』、又、馬二疋を以て内府に奉らる。又、内府より（又自内府）関白殿の御前物を儲けらると云々。若君、実は内大殿の御子也。而るに関白殿、養子と為て賀陽院殿に於いて着袴せしめ給ふ。仍りて相共（□□□）に牽出物等有る也。

※1 今日亥刻、権大納言（『行成』）の御子（『行経』）元服。加冠は春宮大夫（『頼宗』。理髪は右京大夫師経朝臣。牽出・送物・被物等有り。又、上達部・殿上人の被物等有り。

▽a「政有る事。〔不堪定の事。〕」

▽b「東宮・関白殿・御堂等の御読経結願の事。」

廿六日、辛酉。天晴る。

結政所に参る。政有り。〔上は右衛門督（『実感』）事畢りて上以下、陣に参る。右府（『実資』）兼ねて参着せらる。晩に及び、当年の不堪定有り。深更（『須更』）に及び、事了りて人々退出せらる。春宮大夫（『頼宗』、位記請印を行なはる。

今日、東宮・関白殿・御堂等、御読経結願。

治安二年

※1「官奏の事。」

廿七日、壬戌。天晴る。

参^{※1}内す。右府（^{※1}実資）、官奏に候ぜらる。〔当年の不堪田文并びに後不堪（^{※1}後少堪）及び減省・講読師の文等。〕

▽a「官奏の事。」

廿八日、癸亥。天晴る。

内府、官奏に候ぜらると云々。

※1「政の事。」

廿九日、甲子。天晴る。

結^{※1}政所に参る。政有り。へ上は皇太后宮大夫（^{※1}道方）。請印了りて、上以下、南所に着す。三番の申文。事了りて、上以下、陣に参る。内印有るべしと云々。晩に及び、退出す。

※1「追饗の事。」

卅日、乙丑。天陰る。

次^{※1}いで参内す。戌刻に及び、追饗所に着す。兼ねて右大弁（^{※1}定頼）、座に在り。頃之、権大納言（^{※1}行成）参着せらる。中務丞の代・陰陽允桑原重則、分配の札を取り、上卿に覽ぜしむ。返給はるの後、省録、壇下に於いて召唱ふ。了りて開門。陰陽寮、葦矢・桃弓等を取り、上以下に奉る。了りて長人の参進等の儀、皆（^{※1}昨）、常の如し。上以下、笏を挿み弓矢を取り、長人に随ひて南庭に入立つ。事了りて帰宅す。